

令和4年度

第1回総合教育会議会議録

(開会 令和4年9月13日)

(閉会 令和4年9月13日)

岐阜県可児市教育委員会

令和4年9月13日午後2時00分開会

出席者

富田成輝君（市長）

丹羽千明君（教育委員）

長井知子君（教育委員）

渡辺勝彦君（事務局長）

佐野政紀君（学校教育課長）

堀部好彦君（教育長）

小栗照代君（教育委員）

伊藤小百合君（教育委員）

飯田晋司君（教育総務課長）

教育委員会事務局職員

木村彰伯君（教育総務課総務係長）

古川詩織君（教育総務課総務係）

小池拓哉君（教育総務課総務係）

開会宣言

- **市長（富田成輝君）** 令和4年度第1回目の総合教育会議の開会を宣言。

あいさつ

- **市長（富田成輝君）** 今日の議題は、現在の教育委員会の取組の評価と今後の展開という非常に大きなタイトルである。各委員から率直に現在の教育委員会等の活動も含めた学校、子育てについて意見を伺いたい。

前提として、現在基本になっている教育大綱や教育基本計画を今後どういう形にしていくのか御意見を伺いたい。今日はそれをどうするかという直接の話ではなく、そこへ向けての現在の皆さんの率直な感想、御意見を経験の長い順番で御発言をいただきたい。

- **教育委員（丹羽千明君）** 今月末をもって教育委員を退任ということで、教育委員会でいろいろ話し合ったことを実現することができて、大変やりがいがあったと感じている。この8年間で感じたこと、特に施設や設備について4点話したい。

まず1点目に、教育委員1年目の時に、教室の冷暖房のエアコン設置について白熱した議論があった。結果、市でたくさんの予算をつけていただき、まず普通教室にエアコンを設置することができた。そして令和3年度に特別教室にもエアコンを設置することができ、大変快適な学校生活が送れるようになったかなと思う。

2点目に、洋式トイレに慣れている子供が学校のトイレに困っているということで、トイレの洋式化が議題となった。低学年のトイレの洋式化は早速つけていただいたが、課題として残っているのが高学年、また中学生のトイレ、そちらの整備も今後必要になってくるのではないかなと思う。

3点目に、令和2、3年度にICT機器の導入ということで、1人1台のタブレットと各普通教室に電子黒板機能付き超短投写プロジェクターをつけていただいた。ちょうどコロナの時期にリモートで授業を行うことができ、ICTは今とても活用されており、大変よかったと思う。今後の課題として、何年先か分からないが、機器の更新時期がきたとき、今回と同じように国からの補助があるかどうかはわからない。そのときに予算がないと困ると考える。まずは今回導入したものをできるだけ長もちするように使っていけないといけないと感じている。

4点目に、今年の3月に蘇南中学校の大規模改修工事が完了したが、使い勝手がよく、先ほど言ったトイレもきれいであり、子供たちも大変喜んでいると思う。学校の建設時期がほぼ同時期であるため、今後も順番に大規模改修が必要になるので、大変予算が要ると思うが、そちらもお願いしたい。

以上、施設や設備についての4点感想を言わせていただいた。

- **市長（富田成輝君）** 最初のエアコン設置の話はとても懐かしく思う。あのときの議論を思い出すと、結構反対の意見もあった。当時は甘やかすなという声や、国が補助を出さなくなったことから市の自主財源で普通教室に設置した。今となっては最初から特別教室もやればよかったかもしれないが当時は結構まだ、このくらいのことでへこたれてどうするんだという意見もあった。

今おっしゃったように、本当にこれからもやらなきゃいけないことがいっぱいあるが、

やっぱりハード、ここをきちっとしないといけないので、また今一生懸命必要な財源確保、国が当てにならないかも知れないので、基本的には最低限のことは自前でできるように、いろいろ子供たちに我慢してもらうところはしてもらいながら、本当に必要なことは最低限でもやれるようにしていかないといけないと思う。

でも、全体の予算の中では義務教育の予算は大きく占めている。だから、その分がほかの整備のほうへしわ寄せが行っているわけで。だけど、やっぱり子供たちが一番大事なので、しばらくは続くと思う。非常に重要な点を御指摘いただきました。

○ **教育委員（小栗照代君）** 私は、2点お話をさせていただこうと思う。

1点目は、小規模特認校のこと。今年度から始まり、子供たちも楽しく通っているということで、スタートとしては大変よかったのではないかなと思う。

兼山小学校だからこそ、この学校で学びたいという子供たちが集まり、兼山小学校にとっても複式学級の回避ということで、これは大変いいことをできたのではないかなと感じている。

あともう1点、コロナのことで、消毒やオンラインでの授業など各学校工夫をしながら、何とか今乗り切らせていただいているのは本当にありがたいことだなと思っている。

コロナについての問題点ということで、学校訪問で各学校の皆さんがおっしゃったことは、マスクをなかなか外せないということ。熱中症の対策で外に出るときにマスクを外すようにという指導をしてもなかなか外してくれない、多分メンタル的なものだと思うが、そういったところを御苦労されているというお話を伺った。

それから、コロナの影響かどうかははっきりは分からないが、子供同士のちょっとしたトラブルが多くなってきたような気がする。それが不登校につながるというお話もあった。

それから、マスクで顔が見えないので、子供たち同士コミュニケーションが取りづらくなっているのではないかなということや、いろんなことがコロナによって先生が指示をしなければいけないような状況が多いので、逆に言うと指示をされないと動けなくなっているようなお話もあったため、判断力を身につけさせるということも徐々にやっていかなければいけないと。

そのため、長期的に見て、コミュニケーションや心の教育の話は、今後コロナの影響というのはどういう形で出てくるか分からないので、注視していかなければいけないと思っている。

また、自身の周りでもコロナの後遺症の話があり、後遺症で苦しんでいる方は数としては表れていないが、学校の子供たちであったり、先生たちであったりということも見えないところであるのではないかなということで、そのフォローもしっかりしていかなければいけないと思っている。

○ **市長（冨田成輝君）** コロナ禍でコミュニケーションとか、子供たちの付き合いへの影響とか、それは本当にいろんな学者がおっしゃっていて、人の顔を見ていろんな感情を理解する大切な時期にそれができない。このことの将来への影響の大きさを、指摘する先生も見えますし、おっしゃったように先生が一々指示しないと対応できないとか、子供たちに不必要なトラブルができてしまうとか、本当にあると思うので、非常に難しい。一応法的に国、教育委員会の教育的な指示を守ることがあるの

で勝手なことはできないが、薬ができれば、がらっと変わってくると思うので、そのときにどういうふうに修正していくかということはおっしゃるとおり。今から先生方にそれぞれの学校、教室でのコロナの影響と見られる別の意味の後遺症、それを今から意識してもらって、普通の生活に戻れたときにどういうふうに修正していくか考えていただくといいと思う。それと先生を支援する市単のサポーター、可児市は結構予算をつけてお願いしている。人材不足という点もあるが、引き続き先生方をサポートする、あるいは子供を支援する、そういう人の助けも要るかなと思う。

それから、後遺症の問題は、残念ながら市では把握できない。ワクチン接種は市がワクチンを接種するので、接種による後遺症は我々調査できるが、後遺症はどこが誰が感染したかも一切分からないので、これは個人情報なので市といえども把握できない、要するに医療情報は出せない、保健所も出したくても出せない、法律違反になるので。可児市に延べ今1万5,000人ぐらい感染者がいるけれど、そのうちに誰がどのくらい後遺症でまだ苦しんでいるかというのは、実は分からないので。だけど、そんなに多くはないようですが、おられることはおられるみたいなので、今後、なかなか医療的な分野は行政では手出しできないが、そういう方に対する支援というのも新たな課題で出るかもしれない。

医療ケアについては我々が口出す出番はないけれども、後遺症の影響で社会活動ができない、収入が入らない、生活が苦しいというふうになったときの支援はできるわけですから、ちょっとその辺りは今後課題かもしれません。

○ **教育委員（長井知子君）** 可児市でも不登校の児童生徒が多いが、先日、岐阜市立草潤中学校へ教育委員会の研修会で伺ったので、その話をさせていただく。

草潤中学校は、この学校に来たい先生が赴任し、担任の先生は子供が選ぶ、そしてコンセプトが「ありのままの君を受け入れる新たな形」という学校であった。

校長先生方のお話を聞いたときに、とても衝撃を受けた。何が衝撃的だったかというと、まずは徹底した子供ファーストということ。親だとやっぱり子供を育てる上で、社会に出ても必ずしも自分の思いが通るわけでないため、親として厳しく育てようと思うが、ここは全くもって違うので、すごいなということ。改めて不登校の子供にとっては、それぐらいの受け入れる愛情みたいなものが必要なんだなと思った。でも、こちらの学校の最終目標は社会的自立なので、目先にとられることなく、社会に出ていけるように子供たちに接して関わっているという学校であった。

2つすごく印象に残ったことがある。こちらの学校が、不登校の子が人と接することが苦手だと思い、学校に個室のブースを作った。個室ブースがいっぱいになるだろうと校長先生も思っていたそうだが、ブースがいっぱいになることはなかった。私はこれを聞き、不登校の子も人と関わりたいという気持ちがあるんだと。そのため、環境を整えてあげることで、子供は自分の殻から出てくる、そういうものなんだと思った。

あともう一つ印象に残ったのは、校長先生が最後に、うちと同じことはできないですといったこと。その言葉を聞き、それぐらいの覚悟を持ってやらないと難しいと、今後子供を本当に救っていこうと思ったときに、そういったことも真剣に考えていくことも必要だと思った。

最後に、校長先生が、教師は不登校の子をまずは学校に来させて教室に入れようとす

るが、この学校はそれを目指していませんと言われていたことが印象的だった。

○ **市長（富田成輝君）** 草潤中学校は、非常に注目を今後していく学校かなと。

ただ、校長先生に私は会っていないが、言うように、まだ実験段階。つまり、草潤中学校に合う子を何百人不登校の子がいる中で40人だけ選んでいる。しかも40人に対して20人の先生で対応している。また、岐阜市は子供の数がどんどん減り、廃校になる学校を利用することで、逆にできるということもあって、様々な条件でできている。校長先生がおっしゃったどこでもできるわけじゃないというのは、多分、覚悟も要るし、そういう条件がそろって初めてできることだなと私も思う。

ただ、その子たちがどう変わっていくのか。全く学校へ一切行かない、外へ全く行かない子が、草潤中学校ができたから行こうという子が何%いるのかというのがちょっと興味はある。例えば可児市でいうとスマイリングルームへ行っている子がそっちへ移るなら別にそう大したことないが、スマイリングルームもどこも行かないけれども、そこができたなら行くという子がどのくらいいるのかというのは非常に興味を持っている。半分ぐらいか、そういう子は、40人のうちの。

○ **教育長（堀部好彦君）** 900人の不登校の岐阜市のお子さんの中で、160人ぐらいが手を挙げてきたという。その中で40人。

○ **市長（富田成輝君）** 900人のうち160人ぐらいが手を挙げて、その中からまた40人に絞った。今後、草潤中学校をいろいろな自治体が参考にできる部分とできない部分はあると思うが、参考にはなるだろう。

あと、これを可児市に置き換えたときは、教育委員会でやるのは私は無理かなと思っている。ハード、そして先生の数、可児市の状況では多分無理だと思う。学校に来る子の対応だけでも手いっぱい。だから、多分教育というよりも、可児市でいえば市長部局のほうで何か連携できる可能性はあると私は思っている。教育委員会をサポートするという意味では市長部局がやるところがあり、そういう方法はあるのかもしれない。

不登校の子の親御さんと会って話をすると不登校の理由は千差万別。それに全部対応しようとする、草潤中学校でも、割合は5%ぐらいの対応しかできない。ただ、研究モデルとしては今後どうなっていくのか注目。全体900人いるうちの40人。じゃあ、ほかの子はどうなるんだという議論も出てくる。その子らだけ対応していいのかとなると、ちょっと教育委員会では多いなと思う。

だから、今後教育委員会と市長部局と相談しながら、そういう事例も勉強し、何か実験的な、まさに草潤中学校じゃないけど、全員には対応できないけどというのはあるかもしれないね。

可児も増えているんだな、不登校が。不登校の増加はちょうどコロナの時期と合うので、コロナの影響もあると思う。コロナで行かなくなって、そのまま行くことをやめた、休むことがくせになった。それから、さっき話があったように、マスクをしたりすることで、いろいろトラブルが起きて行けなくなったりとか。

だから、間違いなくコロナの影響は不登校にも出ていると思う。今後、不登校の子供を持つ親御さんたちと意見交換する場も市長部局としては今つくってるので、意見を聞きながら、教育委員会でできるところは教育委員会で、教育委員会ではちょっとできないところを市長部局でというような仕組みができないか、いろいろ研究を始めているの

で、もう少しお待ちいただきたい。

- **教育委員（伊藤小百合君）** ICTの推進で、タブレットやプロジェクターを導入していただきありがとうございます。

学校訪問の中で、学校や教員によって、得意不得意だということがあるため、できる範囲で使用していると伺った。

情報主任など、得意な先生を中心に勉強会をしている学校もあるそうだが、授業の準備の時間短縮になっているところもあれば、ICTが入ったからといって残業時間が減ったと感じていない先生がいるという現場の話聞くことができ、それはよかったなと思っている。

休んでいる児童生徒には、タブレットを持ち帰って授業を見ることができるようになっているが、1つの学校では子供に見るか見ないかを選択させている。理由はコロナで休んでいることが誰かが分かっただけで、出てきたときに問題になる可能性があるからということで、あえて授業に参加しないことを選ぶということをさせているという話もあった。

現場で使っている先生方が困っていることや、いろんな課題が今見えてきているが、そういうことは学校から上げていただくことが大事だと思う。まず学校で話し合っ解決できそうなこと、学校から教育委員会に上げて、課題を解決の方向に持っていただけたらと思う。

読解力を問う文章問題をそれぞれ紙面とデジタル端末で県外の小学生に出題したという記事が気になった。

284人の可児市ではない県外の小学生が対象に出題されたが、中学年の小学校3・4年生以下の子供は紙面のほうの回答率がよかったという結果となり、文章を理解していくという上で、デジタルだけではなく、今まで積み重ねてきた紙面での勉強方法というのがすごくやっぱり大事なんじゃないかなというのを感じ、それも念頭に入れて今後見ていきたいなと感じている。

- **市長（富田成輝君）** 非常に重要なポイントだと思う。デジタル機器が合う科目と合わない科目があると思う。論理的に考えるところの学問についてはデジタルが割と合い、考え方を分かりやすくデジタルで分解して説明することで非常に理解が進みやすいと思う。今おっしゃったようにまさに論理的じゃない学問については難しい面もあると思う。だから、ICT整備したが、これをより子供たちにとって役に立つように使っていくというのはこれからである。

あと、コロナになった子が戻ってきて、いじめとかは起きていますか。

- **教育長（堀部好彦君）** それで困っているという話は聞いていないです。特に最初はあるのではという心配はしたが、ほとんどなかったです。

- **市長（富田成輝君）** 教育委員の皆さんに一通り伺いましたので、最後に教育長。

- **教育長（堀部好彦君）** 私が就任してこれで1年半になるわけですがけれども、当初からありがたいなと思うのは、可児市においては教育委員会のカバーする領域が学校教育に特化している。子供たちのためにやらなくちゃいけないことはたくさんあるが、学校教育の部分は私たち、いじめ防止や部活動などそれ以外を他の部局の方々が本当に子供たちのために御努力いただいている。これは本当にありがたいなということ

1年半感じている。

そういった中で、今年は市制施行40周年で合い言葉は「10年後につなげよう、市民の笑顔」であるが、教育委員会としては「笑顔の学校」づくり、籠橋前教育長から引き継いで、その「笑顔の学校」づくりの第2ステージである。「10年後につなげよう、市民の笑顔」というのを子供たちにも当てはめて考えて、一人一人の今の笑顔を未来につなげていく、未来につなげる笑顔の“もと”を育んでいこうといううねりをこの1年半、私としては必死になってやってきたつもりである。

例えば丹羽教育委員は、ハード面の施設のことをおっしゃったが、私がやってきたことは、ソフト面。ソフトの面で、笑顔の“もと”を育む教育のうねりをつくっていきたいというところでやってきたように思う。

その中で、各校、コロナ禍で、校長はよく頑張っていて本当に努力をしている。自分たちの学校が目指す笑顔の“もと”は何だろうかということ正面切って考えている校長もいる。大変ありがたい。

この立場になり、さきほど校長の覚悟って長井教育委員がおっしゃったが、やはり覚悟が要る。今の時代は草潤中学校だけでなく、一般の小・中学校でも覚悟が要ると思う。

そういった点、つまり教育理念や教育観で、私は各校の校長先生方にどんな学校をつくりたいか、どんな笑顔の“もと”を育みたいかということを追っているつもりだ。そこは、言い換えると、校長の覚悟を見極めたいなと思っているのかなと、この立場になって思う。

また、不登校についても笑顔の“もと”という視点で考えてみると、不登校にならないための未然防止のために笑顔の“もと”をどう考えていくかということもあるような気がする。そういう点で、兼山小学校の小規模特認校制度は、不登校未然防止にもつながっているのではないかと。

つまり、大規模校では自分のよさを生かせないが、小規模校で少人数だったら僕は行けるよ、私は頑張れるよと兼山小学校で頑張っている子がいる。そういった特性の子供の笑顔の“もと”を育んでいる小規模特認校というような捉えもできるのではないかと思う。

それから、コロナの影響。小栗教育委員がとても心配してくだっているがマスクがとれない。小学校1年生、2年生ぐらいは取れるが、5・6年になってくると取れない。これは本当に大変なことだなと思う。

その中で、コミュニケーションが難しい時代になってきている。しかし、可児市にはa1aとの連携で、コロナ禍における笑顔の“もと”と思うが、コミュニケーション能力を育むワークショップがある。今年度から可児市の全ての学校でこのワークショップを実施することになった。先日、a1aの担当の方からの実績報告書が来た。現在、11校中9校実施したが、どの学校も成果がたいへん大きい。例えば、1時間、2時間のワークショップだったが、4月、5月の段階で、初めて友達と目が合った。仲よしになれたという感想があった。やはり演劇の手法を活用したワークショップは本当に大きく、a1aとの連携も今後笑顔の“もと”を育むためには非常に有効なものだと思う。

あと、施設、設備のところではICTも大変な予算をかけてやっていただき、すぐに配備していただいて、これは大変ありがたい。

伊藤教育委員がICTの活用について話題にさせていただいたが、市長も言われるように、学力の向上に結びつけるにはまだ時間がかかるかもしれない。どうしてもタブレットありきで、これを使いこなさないといけない気持ちでスタートする。いろいろ試行錯誤しながら、読解力を身につけさせるためのICT、タブレットの活用をどうあるべきかということをそれぞれ研究してもらえるとありがたいなと思う。西可児中学校がICT教育の指定の研究をする学校になっており、西可児中学校の知見を広めていくことは今後必要だと思う。

机上にある資料は、可児市教育大綱ですが、これは本当に素晴らしいもので、このまま私は次の「笑顔の学校」第2ステージのバイブルとして位置づけていいのではないかなと思う。変えるとすれば、笑顔の“もと”の視点で組み直すということもできるかなということはあると思う。

ここに書いてある5つの目標で、3番と4番、夢や、ふるさとを愛することや、社会に貢献ということは、全て笑顔の“もと”だと思う。したがって、未来の笑顔につながる笑顔の“もと”を育てていく視点で組み直すということが、教育大綱や教育振興基本計画でやるといいと思った。

また、コミュニティ・スクールについては、新しい可児市の教育の大きな柱として位置づけられると思う。地域の人と学校が子供たちのどんな笑顔の“もと”を育てていくかを共通認識が持てればと思う。

最後に、これは市長に報告ですが、4月にばら教室に着任した18歳女性の学習指導員は中学1年生のときに日本に来られた。ばら教室、市内の中学校、地区の高校で勉強し、ばら教室の先生になりたいと試験で受かった。かつての教え子が自分たちの仲間である指導員になったということで、ばら教室の先生方はこの子は本当に自慢の子ですと言い、室長さんは可児市の宝だと言っている。

会って話をして、いろんな話を聞かせてもらったが、この6年間、ばら教室から始まって、中学校、高校、この6年間で成長したことを聞いたら、自立と言ってみえた。自立が成長できたことだと。

私は本当に素晴らしい可児市の教育だと思う。この子の笑顔の“もと”を育てた、未来の笑顔につながる笑顔の“もと”を育てた可児市の教育というのを本当に私は誇りに思い、そういった姿を理想とし、具体的なものを共有しながら新しい教育大綱や教育振興基本計画を策定していきたいと思う。

○ 市長（富田成輝君） 教育長がまとめていただいた。

○ 市長（富田成輝君） その他というのが2番目にありますけど、何かどうしてもということがあれば。よろしいか。

○ 教育委員（小栗照代君） 一言だけ。

学校訪問のときに先生の労働時間の問題をどこの学校でもおっしゃっていますので、そういう問題もあるということを一言言っておきたい。

○ 市長（富田成輝君） そのほか、よろしいか。

〔挙手する者なし〕

○ 市長（富田成輝君） 本日の会議を基に教育大綱、教育計画の策定の参考にしていただければと思う。

閉会宣言

- 市長（富田成輝君） 令和4年度第1回目の総合教育会議の閉会を宣言。

閉会 午後3時03分